

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 心理学 ）	氏名	楊 琬 璐
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論 文 題 目			
情動音刺激データベースの拡張と有用性の検討			
論文審査担当者			
主 査	教 授	宮 谷 真 人	
審査委員	教 授	中 條 和 光	
審査委員	教 授	湯 澤 正 通	
審査委員	准教授	中 尾 敬	
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、心理学的感情研究において国際的によく使用される情動音刺激データベースである International Affective Digitized Sounds の最新版（以下、IADS-2）を改良、拡張して新データベース（The expanded version of IADS, 以下 IADS-E）を作成し、IADS-E が今後聴覚刺激を用いた研究を展開する上で有用であることを示した論文である。</p> <p>論文の構成は、次のとおりである。</p> <p>第1章で、著者はまず、聴覚刺激を用いた感情研究の重要性を述べている。人間は日常生活において意識的、無意識的に多くの音に曝されていること、視覚刺激は目を向けなければ入力されないのに対し、聴覚刺激は耳を塞がない限り全方向から入力されるという特徴があることなどから、音が人間の感情に及ぼす影響は大きいと主張する。それにもかかわらず現状では多くの感情研究では視覚刺激が用いられていると概観し、その原因として、感情を適切に喚起できる聴覚刺激のデータベースが不備であることを指摘している。</p> <p>さらに著者は、IADS-2 の特徴を分析し、その問題点として、刺激数が 167 音と少ないことが原因で、動物、自然音、生活音などの意味カテゴリーに分類した場合に、極端に刺激数の少ないカテゴリーがあること、刺激の快-不快と覚醒度によって定義される二次元感情空間内の分布が偏っており、快または不快で覚醒度の低い刺激数が少ないことを挙げている。それを踏まえて、本研究の第1の目的が、IADS-2 を基に、新規の刺激を収集・追加することによって、情動音刺激データベースを拡張することであること、第2の目的は、新たに作成した IADS-E を実際の研究で用いることにより、その有用性を検討することであると明示している。</p> <p>第2章では、課題遂行に支障のない聴力を有する 207 名の大学生の参加を得て、IADS-E を作成した研究1について報告している。まず、インターネットからの著作権フリーの音源の収集、不快かつ低覚醒度の音の作成を専門家に依頼するなどして、1,226 音を準備した。予備調査の結果、実際の実験を想定した長さ（6 秒）で提示した場合に不自然なもの、音声を含むものなどを取り除いた 768 音を選び、IADS-2 の 167 音を加えた 935 音について、快-不快の程度、覚醒度、意味カテゴリー、喚起される感情の種類（喜び、恐れ、悲</p>			

しみ) などについて詳細な評価を行った。その結果, IADS-E は, IADS-2 と同程度の信頼性を有し, 動物, 人物, 自然音, 生活音, 交通音, 効果音などの意味カテゴリーで最低 54 の刺激を確保し, 快-不快と覚醒度による二次元感情空間において, 最も刺激数の少ない不快-低覚醒度の象限でも 138 音が含まれるデータベースであることが確認された。

第 3 章では, IADS-E が心理学における感情研究や記憶研究に有用であることを示す 2 つの実験 (研究 2-1, 研究 2-2) が報告されている。研究 2-1 では, 感情価及び意味カテゴリーの両方が対応した刺激ペアを作成し, 感情価と意味カテゴリーそれぞれの一致性が視覚刺激に対する感情評価に及ぼす影響について調べた。先行研究で, 音と画像の感情価の一致性が, 画像そのものの感情評価に影響を与えることが報告されているが, 研究 2-1 では, それに加えて, 意味カテゴリーの一致性が情動的画像刺激の感情評価に影響することを明らかにした。著者は, この結果から, 聴覚と他の感覚モダリティの感覚統合に関する研究では, 意味カテゴリーの点から刺激を統制する必要があることを主張している。

研究 2-2 では, 刺激の快-不快と覚醒度が記憶に及ぼす影響に関する研究結果が一貫しないことの原因を, 刺激を感情価や覚醒度の高低による条件に振り分ける際に, 相対的基準 (例えば, その研究で用いる刺激セットの中央値) を用いるか絶対値に基づくかの違いにあるという仮説を立て, それについて検討した。IADS-E を用いて刺激の快-不快と覚醒度の絶対値による条件分けを行ったところ, 視覚刺激を用いて同様の方法で条件分けした先行研究と類似の結果が得られたことから, 刺激を条件に振り分ける方法によって記憶促進効果の現れ方が異なることが示された。著者は, これらの結果に基づき, 各意味カテゴリーに十分な刺激数を含み, 快-不快と覚醒度で定義される二次元感情空間の広範囲に刺激が分布する IADS-E が有用であると結論している。

第 4 章では, 研究 1 と研究 2 を総括して, その成果と意義を考察するとともに, 本研究で得られた感情評価が, 高齢者, 子供, または他の国に適用可能か否かを検討する必要があることなどを今後の課題として挙げている。

本論文は, 次の 3 点で高く評価できる。

1. 視覚刺激に比べて圧倒的に数が少なかった聴覚的な感情喚起刺激を提供することにより, 今までではできなかった刺激の統制が可能になり, 今後の聴覚刺激を用いた心理学研究の発展可能性を大きく広げた。
2. 感情研究に関して, モダリティが異なる複数の刺激を組み合わせ提示する際, 従来報告されていた感情価の一致, 不一致の効果に加えて, 意味カテゴリーの一致, 不一致が感情評価に影響するという新しい知見を得た。
3. 刺激の感情価が記憶に及ぼす効果に関する研究結果の一貫性のなさの原因が, 感情価の高低により刺激を条件分けする際の基準値の定め方の違いにある可能性を指摘した。

以上, 審査の結果, 本論文の著者は博士 (心理学) の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成 31 年 2 月 4 日